

第8回 ふくまる夢たまごセミナー

日時 11月16日（金曜日）18時～20時

場所 池田市庁舎7階大会議室

内容 先輩に学ぼう PART 1

講話「子ども理解と学級（集団）づくり」

講師：福川 里実 指導員（教育政策課）

大槻あおい 教諭（池田市立五月丘小学校）

宮崎紗矢香 教諭（池田市立ほそごう学園）

第8回「ふくまる夢たまごセミナー」は「先輩に学ぼう」シリーズ第1弾（PART 1）として、五月丘小学校から大槻あおい先生、ほそごう学園から宮崎紗矢香先生、教育委員会から福川里実指導員、以上3名の先生方から「子ども理解と学級（集団）づくり」についてお話をいただきました。

最初の講話は教育政策課幼児教育サポートチーム指導員の福川先生のお話でした。幼児教育サポートチームは、市内の幼稚園などの施設や家庭への支援体制を整備するとともに、小学校や地域の関係機関との連携強化を図るため、今年度、新たに教育委員会内に設置されました。その中心的役割を指導員として福川先生が担っています。

福川先生からは、市立幼稚園やなかよしこども園での豊かな経験を振り返りながら、「子ども理解」という視点でお話いただきました。

自己紹介をされた後、乳幼児期の育ちが、「生まれ月による個人差」「発達の個人差」「生育環境や生活環境による違い」等により、ひとりひとり、みんな違っているということ、まずはそれを理解



し、受け入れていくことの重要性について話されました。意思表示することや表現することが十分でない乳幼児だからこそ、子どもの言動の裏にあるものを敏感に察知し、気づいていかなければなりません。また、子どもの求めにどう応じていくのか、認めていくのかなど、教師や大人の役割は大きいと言います。

“個”の育ちを保障していくことこそが、“集団”づくりへの第一歩であることを強く感じるお話でした。

最後に、福川先生自身の愛読書として、子どもたちや保護者に何度も読み聞



かせをし、大事にされているという絵本「てん」(ピーター・レイノルズ作 谷川俊太郎訳)を塾生のみなさんに紹介(読み聞かせ)していただき、講話を終えられました。

「子ども理解」の根幹に関わる乳幼児期のお話ただけに、小学校、中学校教師を志望している塾生のみなさんには、たいへん新鮮だったよう

す。

次に、五月丘小学校の大槻先生の講話に移りました。大槻先生のレジュメには「理想と現実・笑いと涙」というタイトルが掲げられていました。教職8年目の大槻先生からは、タイトルどおり子どもとともに笑ったり泣いたり、悪戦苦闘しながら学級集団を作り上げていく過程を、新卒当初からほぼ毎日発行している学級通信をもとにお話していただきました。学級通信の名前の由来や、子どもをどんな時に叱ってきたのかなど、塾生のみなさんからの質問を受けながら話が進んでいきました。



大槻先生は、学級通信を書くことの意味を「子ども理解」の一環であると話されていました。今日一日の振り返りとして、思い起こす時、全く子どもが見えていないと思う日もあります。「学級通信を書く」という意識を持って教室を見渡すと、様々な子どもの姿が見えてくるのだそうです。そんな子どもの少しの変化を見逃さず、書き留めていく学級通信にしているそうです。塾生のみなさんに配布された学級通信の中には、授業や行事を通しての感動や達成感、教師や子どもたちが悩み苦しむ様子など、大槻学級の変容がそのまま映し出されていました。



失敗談も、前向きな話に置き換え、それを乗り越えて次へ進もうとするたくましい大槻先生でした。その元気ではつらつとした姿に、塾生のみなさんも勇気づけられたようです。

続いて、ほそごう学園の宮崎先生から「子ども理解と学級づくり」についてお話がありました。

教職 9 年目を迎える宮崎先生は、数学の先生で、今年 4 月、北豊島中学校からほそごう学園（義務教育学校）に転勤され 7 年生を担当されています。

宮崎先生は、「子ども理解」とはどういうことかを、生徒から教えられたという体験を、北豊島中学校当時を振り返りながら、昨日のここのように話していただきました。学級経営に苦しんでいた当初は、子どもともじっくりいかず、すべて他の先生のやり方を真似ながら、子どもを叱ったり、注意する日が毎日のように続きました。当然、生徒はどんどん先生から離れていくばかりでした。生徒のために、クラスのためにはと思い、一生懸命に取り組んでいたつもりだった宮崎先生は、思い悩みます。そんな時、ある男子生徒が先生にかけた一言がありました。



「先生、俺らのこと全然見てへんなあ」

宮崎先生は、この言葉に救われたと言います。子どもたちは、反発しながら自分の事をしっかり見ていてくれた。自分は、子どもたちのいいところは見ようともせず、ただ怒るだけだった。子どもを見るということは、表れる言動の裏を見ることであり、人真似で指導するのではなく、自分のやり方で生徒に寄り添うことだと気づかされたそうです。



こうして、生徒の見方が変わってきたら、子どもたちも変わってきたそうです。「先生、この頃笑顔が増えてきたなあ」と言われた時には、それまでどんな顔で生徒たちの前に立っていたのだろうと反省したそうです。

宮崎先生は、こうした経験を通し、「子ども理解」の重要性を学び、先生次第で子どもは変わるのだと思うようになったと話されました。

学級集団づくりでは、前述の「子ども理解」を基盤にしつつ、学級通信を発行したり、「クラスノート」や「思いを語る会」を活用して夢や希望、悩み事などを生徒同士で共有したりする取り組みが紹介されました。

以上、三人に共通するのは、まずは教師自身が変わっていこう、子どもの見えないところこそを見ることのできる教師であろうとする姿勢でした。また、子どもに寄り添い、悩み続けながら「学級づくり」に挑戦し続けている大槻先生と宮崎先生でしたが、何よりも、失敗を恐れず、教師自身が笑顔を絶やすこ

となく、目の前の子どもに体当たりしていくことこそ大事にしていきたいと思いました。

大槻先生と宮崎先生は、講話後も、グループ協議にも加わっていただき、「子ども理解」「学級・集団づくり」について、塾生とともに熱心に討議していただきました。



<塾生の感想から>

- 大槻先生のように元気でパワフルに、福川先生のように子どもたちへたっぷりの愛情を注ぎ、宮崎先生のように自分が変わる勇気を持って進んでいきたい。本当に貴重な時間だった。
- 今まで、大学の授業などで「子ども理解」についても学んできたつもりでしたが、今日のお話を聞いて、本当の子ども理解の意味を学べたような気がします。現場実習では、授業を見て学ぶことばかりを意識していて、子どものことを全然見れていないことに気がつきました。子どもに、「こうしてほしい」と要求ばかりするのではなく、まず、私が子どもを信じることで、信頼関係が生まれてくるのだと分かりました。そして、今日一番印象に残ったことは、先生次第で子どもは変わってくるということです。子どもの前では、

常に笑顔でいることを心がけて、安心できる学級づくりをめざすことが大切だと思いました。

○ 子どもと向き合うための自分なりの関わり方を学ぶことができました。私自身、周りと自分を比較してしまい、自分に自信が持てないことが多々あります。しかし、“どんなに失敗を重ねても一生懸命に頑張れば、子どもはちゃんと見てくれている、そして返ってくる”という言葉が、私にとっての励みになりました。自分なりの方法に、まだまだ自信は持てませんが、良い意味で回りからたくさんの学びを吸収しつつ、「自分」を大切にできる人になり、そしてその学びが、子どもたちに伝えられるようになりたいと思いました。今後も、私はありのままの自分で子どもたちに関わっていきたいです。

○ 現場の先生からの生の声を聞ける貴重な会でした。日々何が起こるかわからない教室で、それを語る先生方の顔は、とてもすてきで、教師っていいなあと、改めて感じました。子ども理解という点で、自分自身の考えを押し付けてしまいがちですが、本当に心の中まで見ないと、子どものことは分からないということがとても印象的でした。子ども理解をおろそかにしてしまっただけでは、良いクラスづくりはできないとわかりました。子どもがそれぞれ違うように、先生もそれぞれ個性と言うものがあり、目の前にいる子どもも違うので、今日聞いた話を全て使えるわけではありませんが、一つの引き出しとして、自分なりに考えていこうと思います。

○ 福川先生の子どもに共感するということや、子どもの作ったおもちゃが失敗作だったとしても、それを先生と一緒に作り直すエピソードをお聞きしました。共感するという事は、大学で学んできましたが、失敗したということ子どもたち自身でわかり、試行錯誤する過程を子どもと体験するという大切さを学ばせていただけてよかったです。

大槻先生の学級通信のお話で、毎日出されているということを知り、驚きでした。それをきっかけに子どものことをよく観察したということもお聞きしました。小さな発見や子どもの行動を見逃すことなく、見ておられるのだと思いました。私自身もこのように、きっかけを作って、これからの現場実習に生かしたいと思います。